

松本清張全集 2

松本清張全集

2

松本清張全集 2 眼の壁・絢爛たる流離

定価 1400円

1971年6月20日第1刷 1978年4月15日第5刷

著者 ©松本清張

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03-265・1211

印刷所 凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

眼の壁

3

絢爛たる流離

239

解説

尾崎秀樹

458

装帧 伊藤憲治

眼
の
壁

東京駅の二二等待合室

六時を過ぎても、課長は席にもどってこなかった。専務の部屋に一時間前に行ったきりである。専務は営業部長をかねていたが、部屋はこの会計課とは別室になっていた。窓から射す光線は弱くなり、空には黄昏の蒼さが妙に澄

んでいる。室内の照明は夜のものになろうとしていた。十人ばかりの課員は机の上に帳簿をひろげているが、それはたんに眺めているにすぎない。五時の定時をすぎて、ほかの課は二三人の影があるだけだった。この会計課のみが島のように取り残されて灯がついているのだが、どの顔も怠惰しかない。

次長の萩崎竜雄は、これは課長の用事はもっと長くかかるな、と思った。それで課員たちの方へ、

「課長は遅くなるようだから、もうしまいにしようか」

と言った。待っていたように、皆は生気をとりもどして片づけはじめた。

一人一人が、スタンドを消して、

「お先に」

と言って帰ってゆく。その背中が、街の明かるい灯を早く浴びたそうだった。

「萩崎さん、まだ帰りませんか？」

と言う者がいる。

「いや、僕はもう少し」

と、竜雄は言った。

たった一つついたスタンドの灯に、煙草の煙がゆるくもつれる。

竜雄は課長の用事を想像していた。大口の手形を落とす期日が明日である。同時に給料日が重なっている。預金や明日の入金を見つもっても、六千万円ばかりたりないのだ。手形は、もとよりだが、給料も遅配することはできない。

この昭和電業製作所は、工場、支店ともで五千人の従業員をもっていた。一日でも給料を遅らせれば、労働組合が承知しない。

会計課長の関野徳一郎は、昨日からまるで席にいなかった。月末には入金があるのだが、それまでのツナギ資金の調達に奔走しているのだ。課長は、そういう取引の電話は、まったく自席ではしなかった。ほかの課に聞こえても困るし、自分の課でも、次長の竜雄にすら、正式には打ち明けなかった。いっさいは専務室の電話をつかい、専務と相談してやっている。

いままでも、そういうことはたびたびあったが、こんどは銀行がうまくゆかぬようである。この社は取引銀行に一億からの借りがそのままになっている。そのために、銀行が渋っているらしい。それで課長は、昨日からほかの金融方面を当たって、席に落ちついていないのであった。それは、竜雄にも分かっていった。

ところが、今日、このように遅くまで課長が専務室に残っているのは、きっと話がうまくゆかないためであろう。ぎりぎりの明日を控えて、専務も課長も気が気ではあるまい、と想像していた。

(課長もたいへんだなあ)

善良な関野課長が、額に脂汗をにじませて必死の努力をしているかと思うと、萩崎竜雄は先に帰る気持になれなかつた。

外は暗くなり、窓にネオンのあかりが映えてきた。竜雄が壁の電気時計を見ると、七時十分になっていた。新しい煙草に火をつけようとしたとき、やっと靴音をたてて関野課長が席にかえってきた。

「お、萩崎君。まだいたのか?」

と課長は、ぼつんという竜雄の姿を見て声をかけた。

「すまない。もう帰ってくれ」

課長は、机の上をせかせかと片づけながら言った。

「すみましたか?」

竜雄は言った。すみましたか、と言うには、暗に通じる意味があった。

「うむ」

関野課長は短くうなずいたが、どこか力はいっている返事だった。ああ、うまくいったのだなと竜雄はそのとき思った。

課長は瘦せた背中を見せて、衝立から合外套をはずして着ていたが、何か思いついたように竜雄の方を向いて、

「萩崎君。君、今晚、用事があるかい?」

と言った。

「いいえ、べつに」

と答えると、

「君の家、阿佐ヶ谷だったな?」

「そうです」

「中央線なら、ちょうどいい。八時すぎに東京駅で人に会うから、それまでつきあってくれんか?」

いいです、と竜雄は答えた。どうせ遅くなったのだ。課長の苦勞をなぐさめるつもりで承知した。二人は警備員だけのいる暗い部屋を肩をならべて出た。専務は先に帰ったらしく、表に自動車がなかった。

行きつけの飲み屋は、土橋寄りの西銀座にあった。会社の近くの横丁だから便利がいい。

狭い店で、こんでいた。煙草の煙にかすんだマダムの顔が笑って、恐れ入ります、と客を詰めさせ、隅の方に二つぶんの椅子をあげてくれた。

ハイボールのコップを竜雄は課長のに合わせる恰好をした。課長を祝ったつもりだった。

「よかったですね」

小さい声で言うど、

「うむ、まあ」

と課長は、ちょっと細い眼に皺を見せた。が、すぐにその眼は、指でささえたグラスの黄色い液体を凝視した。竜雄はそれを見て、おや、と思った。課長は緊張している。その眼つきは、そういう状態にあるときのこの人の癖なのである。

課長は解放されていない。つぎに気にかかることを待っているのだ。なるほど、東京駅で人に会うと言ったが、そのことだなど竜雄は思った。それが当面の金融に関連していることは容易に推察がついた。まだ、すっかり安心な状態ではない、ということも、課長のその眼つきは語っていた。

しかし、竜雄は立ち入ったことがきけなかった。それは、

いわば課長ひとりが専務と連絡してやっている仕事で、次長の彼には相談のないことだった。およその想像はつくが、その内容についてはなんの話も受けないから、はっきりは質問できない——そんな遠きがあった。

竜雄は、そのことをべつに不平には思っていない。次長になったのは去年で、年齢も二十九という若きである。昇進が速いので、皆から羨望されているが、それが反感に変わらないように、しばらくは控えめにするつもりであった。陰では、いろいろと言う者があるが、専務が買ってくれているらしいという心あたり以外には、なんのヒキもなかった。

顔のまるいマダムが、二重顎の上に、口いっばいの笑いをのせながら、二人の方に来た。

「いつも、ご窮屈で申しわけありません」

それをきっかけに、竜雄はマダムと軽口をかわし、課長を引き入れようとした。

課長はときどき、口をはきんで笑っているが、実際にはくつろいではいなかった。あいかわらず見えない緊張が彼をしばって、自由な融合を拒絶していた。それからたびたび腕時計をめぐった。

「行こうか」

と、まもなく課長は言った。八時に近づいていた。

春めいて、宵の銀座裏は人の歩きが多い。

「ずいぶん、暖かくなりましたね」

竜雄は課長を気楽にしようとそんなことをぼんやり言ったが、課長はそれには答えないで、先にタクシーに乗りこんだ。

車の窓の外には、賑やかな街の灯が流れた。それが課長の横顔にうつって薄く明滅する。彼の内心の動揺を現わしているようだった。

六千万円という現金の必要が明日に迫っている。課長はその獲得に必死にたたかっているのだ。両手を外套のポケットに突っこみ、眼を正面の運転台の窓に向けて動かさない。窓には丸の内界限（かかわ）の高い暗い建物がすべってきている。

（課長の仕事も楽ではないな）

と竜雄は思った。

彼はわざと煙草を吸った。

「今晚は、お帰りは遅くなりますか？」

課長は、低く、

「さあね」と言った。その言葉にも、見当のつかない茫漠（ぼうぼく）さが潜んでいた。

「お宅にも、ごぶさたしています」

竜雄はまた言った。それには、課長は、

「近いうちに来てくれたまえ。女房も待っている」

と答えた。銀座から東京駅に着くまでの十分間、二人がかわした話はそれだけだった。竜雄が引き立たせようとしても、少しも弾（はじ）まない会話であった。

車は、駅の乗車口に着いた。

課長が先に立って構内にはいった。旅客の動いている駅の落ちつかない空気が、液体のように体をつつんで揺れた。課長の足はまっすぐに行かずに、左の方に向かった。ガラスのドアは内部の一段と明かるい光を外まで投げていた。一二等待合室である。

課長は、ドアを開けてから竜雄を振り返った。

「ここで待ち合わせる人があるんだが」

「じゃ、失敬しましょうか？」

竜雄が言うど、

「そうだな」

課長は、そこから内部を見渡して、

「まだ、来ていないようだ。それまで、ちょっとはいりたまえ」

と誘った。

待合室は、広く外部と仕切られていた。青いクッションがテーブルを囲み、いくつもの輪をつくってならべられてあった。広く空間をとった大きな壁には、日本の名所の浮彫（うりりゅう）が取りつけられ、地名はローマ字だった。駅の待合室とい

うよりも広いロビーという感じである。

じっさい、そこには外人が多かった。青い服を着た軍人が、一団となってしゃべっている。子供をつれた夫婦がいる。正面の窓口で、何かきいている二三人の男がいる。椅子に腰を深くおろして、新聞をよんでいる者がいる。それらの外国人は、みな大きな鞆かばんを横にひきつけていた。

日本人は三人の男づれが、ぼそぼそと話しあっているだけだった。

課長は壁際の椅子にかけた。竜雄は横にならんで腰をおろした。椅子と椅子との間は、小さなサイド・テーブルで区切つてある。

竜雄は、課長が旅行者でも待つのか、と思った。あるいは東京駅から汽車に乗る人と会うのかもしれない。

「贅ぜい沢な待合室ですな」

竜雄は言った。外人専用の待合室と思ひ違えそうなくらいだった。

ドアを押して入口から二人づれの日本人がはいってきた。課長は立たない。違つたらしい。

竜雄は、テーブルの上のアメリカの写真雑誌をとり上げて、ぱらぱらとめくつた。

二三ページ見ているうちに、課長が、つと立ちあがった。

竜雄は課長の瘦うすせた背を眼で追つた。課長はわりあいゆつくりと模様のある床フロアの上を歩いて行く。そして向こう側の、KYOTOの浮彫ウキリゾウのある壁の下に立つて、おじぎをした。

竜雄は、おや、と思った。それなら、今はいつてきたばかりの二人づれの男のすわつた椅子である。課長は、はいつてくるときの二人に、気がつかなかつたのだらうか。それとも、顔が分からなかつたのかと思つた。

ともかく、その男の一人は、こちらに背を向け、もう一人は横を向いて椅子にかけていた。かなりの距離があるが、竜雄の見たその男の横顔は、四十ぐらいの年輩で、短い頭髪と、赭あかい頬がふくらみ、鉄縁の黒い眼鏡をかけていた。

男二人も課長にたいして、腰を椅子から浮かせた。彼らは課長に頭を下げている。背中をこちらに見せている男の方が、少し丁寧ていねいのようだった。

その男は、向かいあわせの課長に、さ、どうぞ、というような、手のしぐさをした。それで三人は、椅子に落ちつた。

竜雄は、そこまで見とどけて、立ちあがった。ちようど、こちらを向いた課長に、彼は軽く会釈えいせきした。課長がうなずいて、それにこたえたので、赭あから顔の男も、竜雄の方を向いた。眼鏡が光っていた。向こうむきの男は、背中を見せ

たきりで、こちらを一度も振り返らない。

竜雄は、入口の方にゆっくりと歩いていった。

そのとき、彼はドアの向こう側に立っている女の姿を見た。季節のことで黒っぽい洋装だったが、白い顔をドアのガラスに密着するようにつけていた。電灯の光線がガラスに反射して、女の顔と姿を裂いていたが、その輪郭は、いかにも内部の人を覗いて見ているという恰好だった。

それに注目したとき、女の姿は動いて急に消えた。竜雄が歩いてくるのに気がついて、その場を離れた、とでもいえる様子であった。

竜雄は大股になって、ドアを開いて出た。外は、たくさんな人間が歩いて動いている。黒っぽい洋装の女も数えきれないぐらい群の中にいた。彼は、今のが、どの女か、見当がつかなかった。

彼女はたんに好奇心で一二等待合室の中をのぞいていたのか、それとも誰かを探していたのか、と竜雄は考えた。探しているのならまだよいが、誰かを見つめていたのではなからうか。――

「変だな」

なんとなく落ちつかぬ気持で、竜雄は中央線の二番ホームの階段をのぼった。

2

十一時二十分、会計課長の関野徳一郎は、電話をうけた。
「堀口さんというお方からです」

という交換手の声につづいて、

「関野さんでしょうか？」
と、男の声が聞こえた。

「そうです。堀口さんですね。昨夜は失礼しました」

関野は、待っていた、という気持が自然と調子に出た。

「こちらこそ。話は先方に通じてあります。すぐお出かけください。私はT会館でお待ちしています。グリルにいますから」

相手は、渋味のある声をもっていた。

「T会館ですね？」

関野が念を押すと、先方は、そうだと答えて電話を切った。

関野が受話器をおいて、次長の萩崎竜雄の方を見た。帳簿から顔を上げた竜雄と眼があった。竜雄の眼は、電話の内容を了解していた。

「萩崎君。現金を受けとる用意をしてくれんか」

関野の声には、やれやれ安心だ、という響きが、一種の張りをもってこもっていた。

「大型三個でまに合うだろう」

課長は、ジュラルミン製の大型トランクのことを言っている。この会社では、銀行から現金を受けるとき、そのトランクを使用していた。竜雄は、十万円束で三百個近い容積を瞬間に考えた。

「銀行はどこですか」

竜雄はきいた。

「R相互銀行の本店だ」

関野課長は、はっきりと言った。

「僕が電話をしたら、自動車に二三人のせて、R相互銀行にやってくれたまえ」

「承知しました」

竜雄の返事を聞いて、関野は立ちあがった。

彼は上着の内ポケットをあらためるように手でおさえた。そこに封筒がある。封筒のなかには三千万円の金額を記入した約束手形がはいっていた。今朝から用意したものだ。関野は、外套をとって、専務室に行った。

専務は来客中だったが、関野の顔を見て、椅子から立って歩いてきた。小さな男で、背が長身の関野の肩ぐらいいかない。片手をズボンに入れて、

「できたか？」

と低い声で聞いた。さり気ない顔をしているが、専務も心配しているのだ。

「今、電話がありましたから、これから行って来ます」

関野も、小声で報告した。

「そうか」

専務の表情にも安堵が浮かんだ。

「よかった。じゃ、頼みます」

関野は、専務が客の方にもどってゆくのを眼のはしに入れて部屋を出た。

会社からT会館まで車で五分ぐらいだった。暖かい陽ざしが、明かるくビル街においていた。この車の前には観光バスが走っていて、窓から見える乗客の後姿を、関野はぼんやり眺めていた。春になったという感じだった。

T会館の赤い絨毯を歩いて地階のグリルに行くと、椅子に体を折って新聞をよんでいた男が、関野を見ると新聞をたたんで急いで立ちあがった。

長顔で、眼が細く、筋の通った鼻をしているが、厚い唇はゆるんで表情がなかった。どことなく全体が印象にとぼしい顔であった。関野が昨夜、東京駅の一二等待合室で会った堀口次郎と名乗った男であった。

「昨夜は、どうも」

堀口は頭を下げた。

椅子に落ちつくと、堀口は関野に煙草をすすめた。顔つきに似合わず、如才じよさいがなかった。給仕がコーヒーを運んだ。堀口は、煙をゆっくり吐き出すと、

「いま、銀行に電話をしたら、先方は外出しているそうです。しばらくここで待ちましょう」

と言った。

関野は、おやと思った。すぐ時間が気になった。現金を受けとって、会計課員総がかりで給料袋に入れる操作時間の計算が、反射的に頭に来た。時計を見ると、十二時近かった。昼食に出ているとすれば、暇がかかるかもしれない。

「なに、すぐ帰ってきます」

堀口は、関野の気持を読んだように言った。

「通じてあるから、二十分ぐらいで、帰ってくるはずですよ。お急ぎでしょうが、ちょっと待ってください」

「どうも」

関野は頬に苦笑を出したが、心はそれで落ちついた。

「それよりも、関野さん」

と堀口は、椅子から体をずらせるようにして、顔を近づけた。

「私のいたたくものは間違いないでしょうな？」

ささやくような口吻だった。しぶいが、徹とつった声であつ

た。

「二十万円のお礼のことですな。承知しております。約束どおりですから、ご安心ください」

関野も細い声で答えた。

「ありがとうございます」

と、堀口は礼を言つて、

「大山さんに引きうけさせるのに苦労しましたからな。なにしろ、金高が大きいですよ。大山さんも、さすがにしぶりました」

「ごもっともです」

関野は、うなずいた。それはそうだろうと思つた。大山利雄としおというのが、これから会う先方の重役の名で、R相互銀行の常務取締役であることは、あらかじめ名簿を調べて知つていた。

「それだけに、助かりました」

「いや、おたくが堅いから、できた話です。いくら裏日歩を取るといつたつて、危ないところには出しませんよ。そりゃ安心です。ですが、ちょっと金高かねたかが大きかった」

「そうでした。それでどこもまに合わなかつた」

関野は、どこも、と言うのに力を入れた。一流の取引銀行の意味を通じさせた。

「今月の三十日まで、二十日の期間です。販売の入金があ

ると大手筋の炭鉱に納入したものがもらえるのです。実は六千万円不足でしたが、半分は他から借入れができたのです。ほんとうのツナギですから、先方にご安心願って大丈夫です」

「分かってはいます。私からよく言っておりますから。なに、向こうだって裏日歩が欲しいところですから。商売です。堅いところなら歓迎するはずですよ」

堀口は言ってから、顔をはじめてもとの距離にもどし、「なんですってね、いま、炭鉱は景気がいいんですってね」と、普通の声になって世間話をはじめた。

「そうなんです。よく買ってくれるし、支払いも非常に早いですね。うちなんかは——」

関野の話の途中で、給仕が忍びやかに歩いて来た。

「堀口様とおっしゃるお方は——」

「僕だ」

「お電話でございます」

堀口は給仕に椅子を引かれて立ちあがり、関野を上から見て言った。

「大山さんだと思います。帰ってきたのでしょうか」

関野は、堀口が電話の方に行くのを見送って、また上着の胸をおさえた。

堀口が、すぐ、微笑を浮かべながらもどってきた。

車は、日本橋のR相互銀行本店の前についた。増築したばかりで、ギリシャ様式の太い円柱が陽にきらめいて真白い。

二人が車からおりたとき、髪をきれいに分けた若い眼鏡の男が立って待っていた。堀口を見ると、近づいてきて、「堀口さんですね？ 常務がお待ちしています」

と、かしこまって頭を下げた。いかにも銀行員らしい身ぎれいな服装をしていた。

「ご案内します」

と、きびきびした様子で、先に立って建物の内にはいった。

天井が高く、広場のような空間には、無数の机と人間が整然とうまっていた。おびただしい螢光灯のスタンドは設計的な配列を思わせた。外来客に、一步はいるやいなや、一種の威圧を与える銀行特有の秩序があった。

客だまりの大理石の床を突ききって、若い行員は、堀口と関野を応接室に引き入れた。白いカバアをかけた四つの椅子が一つのテーブルを囲んでいた。卓の上には温室咲きのチューリップが花瓶に挿してある。

「すぐ、常務を呼んでまいります」

行員は一礼すると、もとのドアから、いそいで出て行っ

た。

二人は椅子にかけた。堀口は接待煙草を一本ぬき取って吸う。関野は、いつ現われるか分からない大山常務を待つて、神妙に控えた。

入口とは反対の、奥のドアのガラスに人影が射した。軽いノックが聞こえてドアが動いたので、堀口はあわてて煙草を灰皿に捨てた。

はいつてきたのは、赭^{あか}ら顔の大きな男だった。白髪が銀のように光って、手入れの十分さを思わせた。スコッチのダブルが大きい体に似合った。白い歯を出して、にこにこと笑った。堀口と関野は、同時に立ちあがった。

「やあ」

と大山常務は、堀口の方にまず向いた。

「先日は失敬」

ゆったりとした、含みのある声だった。

「失礼いたしました」

堀口は卓の上に両手を伸ばして頭を下げた。横で聞いている関野には、その挨拶の内容が推察できた。

堀口は関野の方をちょっと見て、常務に言った。

「お話し申しあげた昭和電業製作所の関野会計課長です」

関野には、

「大山さんです」

と、紹介した。関野は名刺を抜きだして、差しだしながら、

「関野でございます。今回はたいへんご無理を願います」

と、丁重^{ていじゆう}にお辞儀^{じぎ}をした。

「やあ。どういたしまして」

常務はあいかわらず赭^{あか}ら顔に笑いをたたえながら関野の名刺をおさめて、

「係に、申しつけてきます。堀口君、あとで来てください」

と言って彼は堀口の顔を見た。堀口は、どうぞよろしくといったように低頭した。常務は、そのまま、大きな背中をまわして、ドアから出て行った。五分とはかからない。

裏日歩付の三千万円の手形割引は、妙な肚^{はら}芸^ぎのようなことで、たわいなく成立した。

「大したものですな。貫禄がありますよ」

と堀口は、常務の消えたドアを眺めてほめた。

「大山さんがあなたに名刺を出さなかったのは、含みのあることですよ。なにしろ、銀行としても、ちょっとはばかる商売ですから。なに、どこでも内証にやっていることなんです。重役ともなれば、いろいろ考えがまわっていますね」

関野は、うなずいた。そうかもしれない、もしかすると、